

## 『休閒抄』と『花鳥余情』：九州大学附属図書館蔵 『花鳥余情』を資料にして

波多野，真理子  
九州大学大学院（博士課程）

<https://doi.org/10.15017/9430>

---

出版情報：語文研究. 78, pp.22-30, 1994-12-25. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 『休聞抄』と『花鳥余情』

——九州大学附属図書館蔵『花鳥余情』を資料にして——

波多野 真理子

九州大学附属図書館蔵支子文庫本『花鳥余情』（以下「九大本」と略称）は、奥書に次のような一文をもつ。<sup>(1)</sup>

此抄河海<sup>廿卷</sup>花弄<sup>七卷</sup>并宗祇以来至于字牧<sup>(1)</sup>說々

天文十九孟秋上旬

昌休誌之

此奥書昌休自筆透写之

昌休といえは、室町時代末期に活躍した連歌師、『源氏物語』の注釈書『休聞抄』を著した里村昌休が思い起こされるが、確かにこの一文は『休聞抄』の奥書、

右源氏抄者河海<sup>廿卷</sup>花鳥<sup>冊卷</sup>弄花<sup>七冊</sup>等用捨之篇<sup>并</sup>宗祇以来至于宗牧<sup>今案之</sup>説々等悉一所書載之連々一部終其功訖不可外見者也<sup>干</sup>時天文十九孟秋上旬、昌休誌之

と酷似している。また、本書第一巻冒頭、『花鳥余情』序の始まる第一丁目の上部右には小さな付箋が添付されており——おそらく後世のものであろう——、呉たしてそれには、「休聞抄、昌休聞書の略

か、一名源氏物語聞書、廿卷十五冊、里村昌休、天文十九年」とある。注釈部分に目を転じると、一丁がほぼ上下に二分され、下段には『花鳥余情』本文が、上段には頭注ともいうべき形で別注記が加えられており、先の付箋は、上段頭注始まりの部分に重ねて貼付されている。下段は紛れもなく『花鳥余情』であるから、付箋の言う『休聞抄』は上部別注記が大いに関わりを持つていると考えられよう。

ところで、この九大本『花鳥余情』と同じような形態をもつ『花鳥余情』が他にも存在する。京都大学図書館蔵『花鳥余情』（以下「京大本」と称す）である。『源氏物語事典』の「諸注釈解題」には、それは『花鳥余情』を本文にたてて、『休聞抄』などを書き入れた本だとあるが、瞥見するに、事実そこには『花鳥余情』本文が下三分の二ほどに書かれ、上部の余白には書き入れ注が、さらに所々行間に新たな項目に対する注釈が施されている。そうした増補部分は、伊井春樹氏によると、『長冊聞書』に依拠した連歌師の聞書、『宗碩聞書』、『宗牧聞書』、『雪月抄』等から成り、つまりは諸注を集成する意識のもとに成立したものであるという。<sup>(2)</sup>

九大本『花鳥余情』もそのような性格の本なのだろうか。『花鳥余情』の余白に別の注釈書である『休聞抄』を書き込んだものなのだろうか。しかし、そう考えることには多少の疑問が生じる。というのは、『休聞抄』はその奥書にもあるように、『河海抄』『弄花抄』などと共に『花鳥余情』の説を取捨して成ったものであり、当然そこには『花鳥余情』が内包されているはずだからである。ところが、九大本は元々『花鳥余情』を有している。上段注記が『休聞抄』であるなら、上段と下段で『花鳥余情』と重複する注記がかなり予想され、それはあまり有意義な事とは思われない。一体、上段書き入れば何なのだろうか。

## 二

この九大本『花鳥余情』について検討する前に、まずその余白書き入れと関連がありそうな『休聞抄』とはどのような注釈書であるのか、それを確かめておきたい。

『休聞抄』に関しては、井爪康之氏に詳細な研究があり、以下はそれに拠るところが大きい。<sup>4)</sup>  
里村昌休(一五一〇～一五五二)は、江戸幕府に仕えた連歌の家里村家の始祖と目される人物で、周桂・宗牧没後の連歌界の実質的な指導者であったが、その昌休が『河海抄』『花鳥余情』『弄花抄』を取捨し、それに宗祇・肖柏・宗牧など連歌師の説を加えて集成したものが『源氏物語聞書』つまり『休聞抄』であると言われている。成立は天文十九年七月。これは、前掲『休聞抄』奥書

右源氏抄者河海昌休花鳥昌休弄花昌休等用捨之篇昌休宗祇以来至于宗牧今案之説々等悉一所書載之連々一部終其功訖不可外見者也干時天文十九孟秋上旬、昌休誌之

による。ただし『休聞抄』の奥書には二種類があり、右は内閣文庫本や松平文庫本、天理図書館本などが共通して有している、いわゆる内閣文庫本系のもの。もう一つは陽明文庫本系の、

右抄物者河海花鳥弄花用捨之篇昌休宗牧老人説昌休聞書等悉一所書載之連々終其功十五冊調之 更莫許外見昌休天文十九季秋上旬、昌休昌休

という奥書である。井爪氏によれば、陽明文庫本系統が『休聞抄』の原形と見做すことができ、内閣文庫本系諸本はそれを整備し、宗碩・永閑・『細流抄』・紹巴の説等を新たに増補した二次的なものようである。ただ、奥書の日付だけを見ると、陽明文庫本系が「天文十九年秋季」、内閣文庫本系は「天文十九年孟秋」とあり、明らかに増補本だとされる内閣文庫本系の方が二カ月早く成立したことになる。それについて井爪氏は、注釈内容からすれば内閣文庫本系は陽明文庫本系に比べて増補されたことが明白であり、また奥書内容も注釈内容と成立事情を正確に表していないことから、中でも特徴のある「桐壺巻や若紫巻を見て、事情に詳しくない者が辻褄を合わせるように、元来付いていた陽明文庫本系の奥書を改竄した」ために起こった誤謬だと論じている。ただし、それでは内閣文庫本系の奥書成立時が二カ月も繰り上げられた理由の説明としては、必ずしも十分ではないだろう。問題が残るところであるが、しばらく井爪氏の説に従っておく。

さて、九大本『花鳥余情』と『休聞抄』との関連性に論を進めよ

う。なお、『休閒抄』は便宜上、陽明文庫本と松平文庫本（内閣文庫本系）に拠った。京都大学図書館蔵『花鳥余情』も、先述したように九大本『花鳥余情』と同様の形態であるうえ、内容的にも極めて近い本文をもっていることから、比較対照として忘れてはならない一本である。また、対象巻は空蟬・夕顔・若紫・手習・夢浮橋の五巻に限った。序と桐壺帚木両巻を除外した理由は、九大本『花鳥余情』においては、頭注部分が途中欠落していること、また、特に序・桐壺巻は、他のどの注釈書にも言えることだが、冒頭第一巻だけあって九大本『花鳥余情』、京大本『花鳥余情』、そして『休閒抄』共に、注釈作業に対する力の入れようが窺われ、それぞれを比較検討するのが困難なほど独自の手が加わっているからである。

それが、空蟬以降の巻になると俄然、比較対照作業がたやすくなくなる。注記内容はさておき、項目だけを追っていくと、九大本・京大本『花鳥余情』の余白書き入れと『花鳥余情』本文を合わせたものが、『休閒抄』と重なることが程なくつかめるからである。九大本は頭注部分が下段『花鳥余情』の注釈場所に応じて記載されておらず、甚だしい所では『源氏物語大成校異編』の頁数にして数頁も違う部分の項目が同丁に注釈されているなど、一見しただけでは『休閒抄』との関わりが促えにくいが、京大本で見るとそれが明白となる。すなわち『花鳥余情』本文と余白注記を、記載順に拾っていくと、それがそのまま『休閒抄』の項目になるのである。以下に、九大本『花鳥余情』（上下段）と『休閒抄』（松平文庫本）の空蟬巻冒頭部分の対照を示す。

九大本『花鳥余情』

- 2 我はかく人にくまれば 源  
ノ好色のよし見ヘタリ弄
- 3 なからふましく 此世に也
- 4 なみたをさへ 小君か事也
- 5 かみのなからサリシ カタヘ  
フリコシタル髪也
- 6 まめやかかめさましく  
源の御心につれなき人を  
いひやらんよりしちに我  
身をもてなさんとなり
- 7 のたまひまとはす  
小君をまへくのやうにも  
戀におほせられぬなり  
不繼
- 8 やかてつれなく 女の我と思心也  
つるに二条院の東院に  
うつろひし事もうたかは  
しき事成へし

『休閒抄』（松平文庫本）

- 1 ねられ給はぬ、これは帚木巻をはりつゝきたる詞也  
中川のやとにとまり給へる夜の事也
- 2 我はかく人にくまれば 源氏好色のよしみへたり弄
- 3 なからふましくこそ 此世になり
- 4 泪をさへ 小君か事也
- 5 かみのいとなかへさりし かたへふりこしたる髪也
- 6 まめやかかめさましくと 源氏の御心につれ  
なき人はいひやらむよりしちに我身をもて  
なさんとなり
- 7 のたまひまとはす 小君をまへくのやうにも念頃  
に仰られぬなり不繼
- 8 やかてつれなくて 女の我と思心也

（番号は私に付した）

もちろん、九大本・京大本『花鳥余情』本文と余白注記をあわせ  
た項目全てが、『休閒抄』の項目と完全に一致するわけではない。九  
大本『花鳥余情』のみ、もしくは京大本『花鳥余情』のみに見られ  
る項目もあれば、両本にはなく『休閒抄』だけにある項目もわずか  
ながら存在する。そうしたものを全く無視することはできないが、  
大体において九大本・京大本『花鳥余情』の余白に書かれているも  
のは、『休閒抄』と大いに関連のあるものと考えてよいように思われ  
る。

とはいうものの、先述したように、『休閒抄』には、先んじて成立  
したと思われる陽明文庫本系統とそれを増補改訂した内閣文庫本系  
統の二系統がある。九大本『花鳥余情』が余白注記と併せて『休閒  
抄』を形成しているというのなら、それはどちらの系統の『休閒抄』  
なのだろうか。

### 三

内閣文庫本系『休閒抄』は『細流抄』や宗牧・紹巴といった連歌  
師の説を引いていることが大きな特色であり、それらは全て陽明文  
庫本系『休閒抄』には見られない。そして、そのことが内閣文庫本  
系を増補されたものと見做す大きな根拠にもなっているのである。  
ということとは、そうした内閣文庫本系にはあって、陽明文庫本系に  
はない注に注目することは、九大本『花鳥余情』の形成する『休閒  
抄』の系統を明らかにする足掛かりとなろう。そこで、まず連歌師  
の説の中から紹巴の注と思われる「私巴」説を取り上げてみる。

松平文庫本

陽明文庫本

すき給ぬるも(若紫)

おさなきの母君也私巴尼君也

おとゝ(同)

御殿と可心得私巴

すき給ぬるも

おさなきの母君也

ナシ

これはほんの一例であるが、確かに増補系といわれる松平文庫本  
の注記に対し、陽明文庫本では私巴説は取られていない。全てが  
「私巴」説である「おとゝ」に至っては項目すら立てられておらず、  
その他の部分でも、同じく「私巴」説は全く見ることができない。  
では、九大本『花鳥余情』はどうかというと、それぞれ、「おさなき  
の母君なり私巴尼君なり」、「大殿と可心得私巴(京大本「御殿）」とあ  
り、ほとんど松平文庫本と同じ注である。その他の例も見てみよう。

「なか空なる御程」(若紫)

《九》おさなき身上はうきたると也私巴一向おさなきか分

へり

《京》おさなき身上はうきたると也私巴一向おさなきか分

別有かにては人に添物也私巴いつ方にも又中空なるといへ

《陽》おさなき身上はうきたると也

《松》おさなき身の上はうきたると也私巴一向おさなきか

分別有かにては人に添物也私巴いつかたへも又中空なるといへり

「まひ人」(若紫)

《九》まゆうどゝよむ也私巴にんといふ人あり誤なり楽人

といふとての事にや

《京》まひうど、よむ也弄 秘色にんと云人あり誤也楽人と云  
とての事にや

《陽》まゆうとよむ也

《松》まゆうとよむ也弄 秘色にんと云人有誤也楽人と云とての事にや

こうしてみると、一目瞭然である。九大本『花鳥余情』は、「私巴」以下の注記がなされない陽明文庫本ではなく、松平文庫本とその性格を一にしている。そして、それは単に「私巴」説の扱いのみにとどまらず、おそらく昌休の聞書が元になっていると思われる『休聞抄』独自注においても奇妙なまでに一致するのである。「よの中のたうり」(若紫)では、

《九》僧都詞殊勝なり

《京》僧都の詞殊勝也

《陽》ナシ

《松》僧都詞殊勝也

と、陽明文庫本だけがこの項目を有していない。また、「こみやすところ」(若紫)は、

《九》源の御母君におくれ給し事を思出給ふ也

《京》源の御母君にをくれ給し事を思出給也

《陽》源の御母君にをくれし事を思出給也御子をもち給より

御息所と申と也其ニよるへからすと也

《松》源の御母君にをくれ給ひし事を思出給也

詳しく説明する陽明文庫本に対して、その他の本はいずれもその前半部分だけの簡略なものになっている。こうした差異は空蟬・夕顔・若紫・手習・夢浮橋の五巻を通して見られるものであ

り、従って九大本『花鳥余情』と密接な関連があるものは増補版の内閣文庫本系であると考えられよう。

ところで、『花鳥余情』に注記項目を加えた全体が『休聞抄』の体を成しているということは、新たな書き入れの部分は少なくとも『河海抄』『弄花抄』その他連歌師の注釈ということになる。とすると、肝心の『花鳥余情』本文は『休聞抄』ではどうなっているのだろうか。いくら何でもそのまま全てが加工されることなく無条件に『休聞抄』に取り込まれているわけではあるまい。

そこで、頭注部分において『花鳥余情』と重複する項目、又、下段『花鳥余情』本文の行間や末尾に加えられている書き入れに注目してみると、それらは『花鳥余情』の注釈に比して、意外にも目新しい内容にはなり得ていない。わざわざ『花鳥余情』にある項目を別立てし、加えているのだから、『花鳥余情』とは異なる見解が期待されるし、またそうあって然るべきだろうが、意に反し、単に『花鳥余情』の一部を切り出したり、または内容をそのままとめただけのもが少なくないのである。

「なみたをさへおとしてふしたり」(空蟬)

〔花〕これは小君か事也すなはちつき詞には小君かうつ

せみのきみにかよひたる事をいへり

(頭) 小君か事也

〔休〕小君か事也

「いむことのしるしに」(夕顔)

〔花〕尼になり八斎戒をたもつ也

(頭) 五戒を尼になりて保心也

〔休〕五戒を尼に成てたもつ心也〔陽〕

五戒を尼になりて持心也「松」

などが良い例であろう。九大本『花鳥余情』において、わざわざ余白に別注記するまでもないようなものであるが、それを『休閒抄』と対照してみると、こうした頭傍書き入れば、表記など多少の異同はあってもほほ例外なく『休閒抄』の注記と一致する。反対に、頭傍注と重複していない項目については、『休閒抄』は『花鳥余情』をそのまま継承しているのである。つまり『休閒抄』は、『花鳥余情』と同じ項目を別立し、新たな注にした場合はその新注を取り、別立しない場合には『花鳥余情』をそのまま継承しているように見える。このような『休閒抄』に取り込まれた『花鳥余情』の注も、「私巴」説や独自注などと同様、内閣文庫本系『休閒抄』と一致するが、次にそれを確認しておく。この場合、陽明文庫本系と内閣文庫本系とは目立った異同は少ないものの、それでも多少の差異は見る事ができる。

「そこはちにごそあらめ」(空蟬)

『花』ちは地也又持といふ心也

『九』たゝ地かとなり空蟬のことは也

『京』たゝ地かと也空蟬の詞也

『陽』地也或持と也たゝ地かと

『松』地也或は持と也たゝ地かと也うつせみの詞也

陽明文庫本は、『花鳥余情』の「地」持二両説を引いたうえで「地」に解釈の重点を置いていて、それが松平文庫本になると「うつせみの詞也」が加えられ、九大本・京大本では松平文庫本から『花鳥余情』部分を除いたものが頭注としてある。

「世かたりに人やつたへんあちきなくうき身をさめぬ夢になし

ても」(若紫)

『花』源氏の夢の中にかかてまきるゝとよみ給へるもわか身に夢になさはやといふ心也うき身をさめぬ夢も同心也さめぬゆめといふはぬるかうちの夢にはあらずはかなき世をいふへし世かたりに人やつたへんは我身のありさまのためしすくなき事なり

『九』夢になしても我身のなくなりても名はのこらんと也

藤壺の御心也

『京』夢になしても我身のなく成ても名はのこらんと也は

かなき世をたとへて也藤つほの御心也

『陽』うき身を覚ぬ夢とはぬるか中の夢にはあらずはかな

き世をいふへし世かたりには我身のありさまのため

しすくなき事也花夢になしても我身のなく成ても名

は残らんと成藤つほの御心也

『松』夢になしても我身のなく成ても名はのこらむと也藤

つほの御心也

ここでも、九大本『花鳥余情』頭注部と松平文庫本は一致している。陽明文庫本は『花鳥余情』後半部を引くが、その部分は松平文庫本にはない。九大本・京大本『花鳥余情』の書き入れ部分が陽明文庫本『休閒抄』から『花鳥余情』部分を除いたものとなっているのは、本自体がすでに『花鳥余情』なのだから当然と言えば当然の帰結であるが。

さらに、奥書においても、九大本『花鳥余情』の「此抄河海廿卷花廿卷弄花七卷并宗紙以来至于字牧説々、天文十九孟秋上旬、昌休誌之」という奥書は、内閣文庫本系『休閒抄』との関わりを示唆する。本

来の内閣文庫本系『休聞抄』のそれからすれば、全く不備な形のものであるが、「孟秋」という日付からも、やはり陽明文庫本系というよりは内閣文庫本系の方が元になっていると思われる。

#### 四

以上からすると、九大本『花鳥余情』は内閣文庫本系『休聞抄』を内包していることが明らかである。ただ残る問題は、その特異な形態であろう。わざわざ『花鳥余情』に『休聞抄』から『花鳥余情』と重複する部分を除いた注が書き込まれている理由、それは他ならぬ『休聞抄』の成立若しくは享受の事情につながることを考えられはしまいか。常識的に考えて、既に『休聞抄』として成り立っているものから『花鳥余情』部分を選別し、一旦それを分離したうえで、その他の部分を『花鳥余情』に書き込んでいくことはなかなか面倒で困難な作業である。反対に、『花鳥余情』に種々の注を加筆増補して成ったものを、『源氏物語』本文の順番に『休聞抄』の形にしたと考える方が無理はない。なぜ『花鳥余情』に加筆したのか、という疑問もあるかもしれないが、それは『源氏物語』享受の歴史からいえば納得のいくことである。

『源氏物語』注釈史の流れには、その時々でいくつかの分岐点があるが、『花鳥余情』の出現はその一角を成す画期的な出来事であった。兼良は、それまでの『源氏物語』研究が語句の解釈や故事典拠にとどまっていたのを、文意文脈の解釈のレベルにまで引き上げた。その態度は以後の研究者に受け継がれていくことになり、それを更に推し進めたのが、室町中期以降から活躍が目覚ましくなる地

下の連歌師である。彼らにとって『源氏物語』というものは、代々伝授を中心にそれを学問として扱ってきた貴族とは異なり、畢竟、連歌創作のため、教養のためのものであった。そこでは連歌を良く作るために古典を深く理解することが求められ、自然、物語の注釈態度は鑑賞批評的になったのである。『花鳥余情』はそのための必備書であったことは想像に難くない。

『花鳥余情』より約三十年遅れて成立した『弄花抄』は、『花鳥余情』より出典考証を控えた解釈中心の注釈書であるが、注釈の仕方は『花鳥余情』を前提としており、両者に共通する項目には、必要ならば別の視点による注記を、継承する場合にはただ「花鳥」「花鳥に委」「見花鳥」とするだけでわざわざ本文を引くことはしない。つまり、『花鳥余情』と『弄花抄』を同時に読み進め、二つを合わせることで、より詳細な注釈にしようとする方法なのである。

それならば、両方を引く場合、内容、分量からいっても、『花鳥余情』に『弄花抄』や『河海抄』を書き込む方が容易であろう。室町末期の注釈作業は、各注釈書で同じ解釈にしてもできるだけ吸収しようとする態度であったから、一条兼良という大きな権威を背景にもつ『花鳥余情』を基盤にして、その他の注釈書や独自注を書き込むことがあっても、決して不自然なことではないと思われる。

そうした作業の名残と考えることのできるような箇所が九大本『花鳥余情』にはある。『休聞抄』を基準にすれば誤った順番で注釈項目が並んでいる上部書き入れ部分である。それらには、項目の上に印を付けて注意を促したり、誤った箇所並びの最後に「此の前後」などと加筆するなど、順序訂正の跡が見られるのだが、それを夕顔巻の具体的な例で説明しよう。



- 。44 やうめいのすけ
- 49 御たうかみに
- 45 わかく事このみ

46 はらからなと

47 さしてきこえかゝれる

48 このかたには

此みたうかみの前也

50 よりてこそ哥

(番号は松平文庫本『休閒抄』に付した通し番号による)

本来なら50の前にあるべき49が先走りして44の次に入ってしまったが、この部分を『花鳥余情』で見ると、44・49はそれぞれ11・12(松永本番号)<sup>10)</sup>に相当し並んでいる。これは、余白や行間に書き込みをしたり、又は付箋で注釈を増補したような『花鳥余情』があり、それを書写する際に起こった誤写なのではないだろうか。つまり、本来45↪48は『花鳥余情』11(44)・12(49)の余白に加えられるでいた注であったのが、何らかの事情で書き落とされ、『花鳥余情』の項目に引きずられた結果、44の次に49が書かれてしまった、そして誤りに気付いた時点で改めて45以降が写されたということが一つには考えられるのではないか。というのは、他のこうした誤記部分でも、形態は多少異なるものの、やはり誤った部分の最初か最後に『花鳥余情』と重複する項目が存在するのである。『休閒抄』として既に出来上がっているものを部分的に『花鳥余情』に加えるのなら、このような誤りはまず起こり得ないだろう。

しかし、九大本『花鳥余情』の内包する『休閒抄』が初期成立の陽明文庫本系ではなく、補訂された二次的性情をもつ内閣文庫本系

のものとして一致することから、先のような、注記の加えられた『花鳥余情』から『休閒抄』が成ったとする考え方も、不自然さを否めないのはまた事実である。第三節で見た空蟬巻の注「そこはちにこそあらめ」などを参考にすれば、陽明文庫本系『休閒抄』から内閣文庫本系『休閒抄』そして九大本・京大本『花鳥余情』という史的変化が一番自然なようにも思われるのだが。成立年代からしても、天文十九年(一五五〇)成立の『休閒抄』に対し、九大本『花鳥余情』は承応三年(一六五四)の識語を有しており、九大本が『休閒抄』より約百年遅れて成ったことは確かなことである。それでも『休閒抄』成立の初期段階で、九大本と同じような「諸注集成」ともいえるべき形態の、『休閒抄』を内包した『花鳥余情』の存在を考えると、ができるように思われるのである。

### 《注》

- (1) 九大本『花鳥余情』の書誌を以下、概略する。  
写本。三十卷十五冊。大本(縦26・3cm×横19・6cm)。太宰府神社文庫旧蔵。第十五冊末尾に奥書識語あり。内閣文庫本『休閒抄』の奥書に類する記載に続き、『花鳥余情』の文明四年兼良奥書と明応七年五月二日四條隆量の識語、その後「以多本一校了 雅巴判 慶長十八年巳仲冬」部書功/承応三年九月十一日 書写之 雅巴(印)とある。
- (2) 池田龜鑑編『合本源氏物語事典』東京堂出版、昭62
- (3) 伊井春樹氏『花鳥余情』の諸本——初度本から献上本へ——、『長珊閣書』と「御説」——公条の源氏学の発展——(『源氏物語注釈史の研究 室町前期』桜楓社、昭55)
- (4) 『休閒抄の諸本と成立』(『源氏物語注釈史の研究』新典社、平5)
- (5) 井爪氏、前掲論文

- (6) 陽明文庫本『休聞抄』は、国文学研究資料館所蔵マイクロ資料紙焼写  
 真版に拠る。
- (7) 数は少ないが『花鳥余情』の説が完全に捨て去られて項目すら立てら  
 れていないものもある。
- (8) 井爪康之氏「連歌師と源氏物語」(前掲書)、伊井春樹氏「源氏物語注  
 釈史概説」(前掲書)
- (9) 伊井春樹氏「弄花抄」注記の性格——『花鳥余情』から『弄花抄』へ  
 ——(「弄花抄 付源氏物語聞書」桜楓社、昭58)
- (10) 『松永本 花鳥余情』(桜楓社、昭53)